第 5 回食欲・食嗜好の分子・神経基盤研究会　事後解析結果

アンケート集計・解析結果について：有効回答数 67（回答率：67/111 = 60%）
（コメントは、適宜編集して、まとめさせていただきました）

①　参加者の属性について（参加総数 111 名）

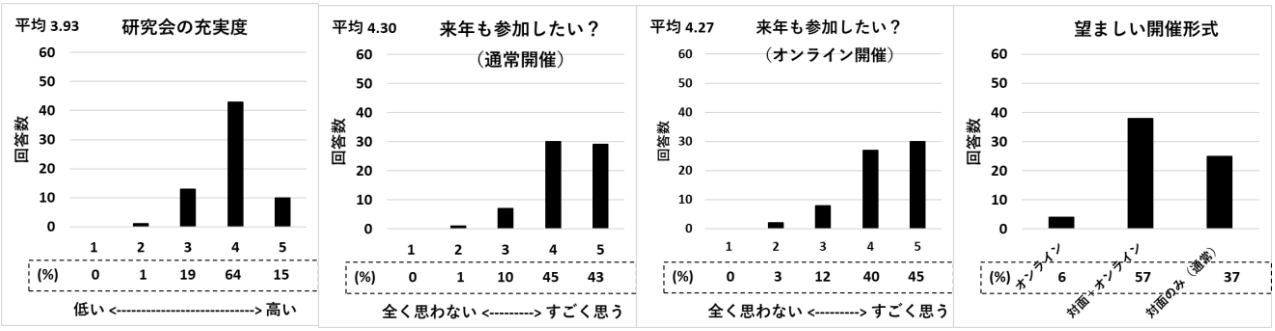
オンライン開催となった今回は、参加者が例年（90～100 名前後）より 1 割ほど増えた。今回と前回（通常開催）の参加者の属性を比較すると、以下のようになった（カッコ内は前回）
属性：アカデミア 69(76)%、産業界 26(18)%、その他 5(6)%
参加者の年代：20 代 33(23)%、30 代 34(32)%、40 代 17(30)%、50 代 11(11)%、60 歳以上 5(4)%

コメントの抜粋

- オンライン開催となり、参加のハードルが下がった。家庭や職場の事情で出張できない人も参加できるし、一部だけ参加することもできる。

解釈と対策：　オンライン開催の結果、参加へのハードルが低くなり、特に学生（20 代）や産業界からの参加者が増えた。出張経費がかからないことが、オンライン開催の最大のメリットである。

②　今回の充実度と希望する来年の開催様式



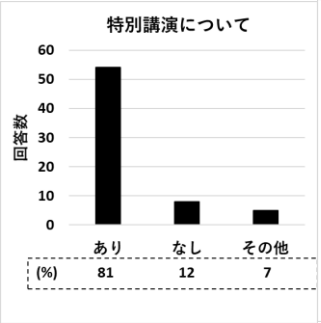
コメントの抜粋

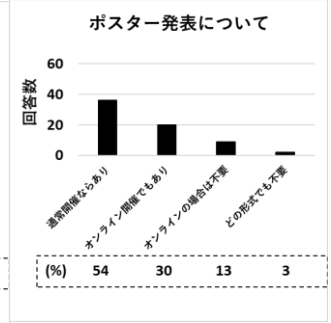
- オンラインだと、発表者の表情が良く見え、親近感がわく。

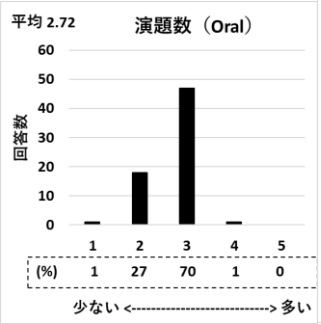
- オンラインだと、質疑応答が難しい。
- 学問領域を広げる上で重要となる「新しい人」との交流（参加者間の交流）が難しい。
- オンライン参加だと出張中にならないため、別の業務が入りやすく、会に集中できない。

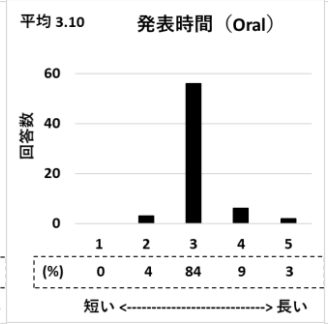
解釈と対策：　開催形式に関わらす来年も参加したい人が多い。ただし、オンラインのみの開催が望ましいわけではなく、コロナ禍という今年の特殊条件下では「良かった」と考えられる。オンラインと対面のそれぞれのメリットを享受したいという要望が多い。

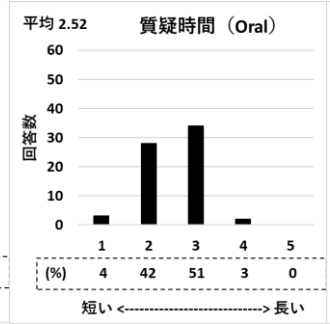
③　発表形式について

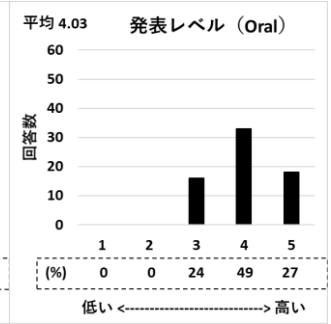












<u>コメントの抜粋・まとめ</u>

- 矢田先生（特別講演の演者）のご講演もご質問も素晴らしかったです。
- 特別講演と一般講演の違いがわかりにくかった。

- ヒト研究の発表も聞きたい。
- ヒト研究者には、ハードルが高い研究会。
- 発表時間は 2 種類（20 分と 10 分）ほしい。

解釈と対策：　今回は初のオンライン開催であったため、例年の「オーラル 2 種類（20 分 or 10 分）＋ポスター」から「オーラル 1 種類（20 分のみ）、ポスターなし」に変更し、省力化を図った。他方、以前から要望のあった特別講演を試験的に導入した。

特別講演の評判は良く、来年も希望する人の割合が多い。

オーラルの演題数は、やや少なく感じられた傾向があり、質疑時間は明らかに足りなかった。

今年開催できなかったポスター発表については、オンサイト（対面）開催ではあった方が良いが、オンラインでのポスター発表の要望はそれほど高くない。

これらを総合的に解釈すると、以下の 3 つが達成目標となる。

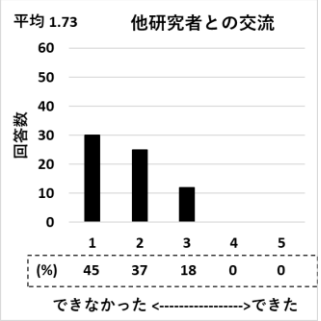
（1）オーラルは、「発表 20 分＋質疑 15～20 分」と「発表 10 分＋質疑 5～10 分」の 2 種類にする

（2）ポスターは、オンサイトのみでオンライン配信なし

（3）特別講演は、開催する

本研究会は、ボランティアによる参加費無料の研究会であるため、運営側の負担を考慮して対応可能な範囲を探りたい。

④　他研究者との交流



<u>コメントの抜粋</u>

- オンラインでの交流促進をオーガナイザーが主導するのは難しそうだ。
- 参加のセキュリティを厳しくし、代りに参加者のメルアドを発表してくださったおかげで、興味はあるのに連絡が取れなかった先生方に直接質問することも可能となり、ありがたかった。
- オンライン開催でも十分メリットはありますが、過去の研究会（対面）と比較すると物足りない。

解釈と対策:　今回のオンライン研究会は、「研究者をつなぐ」取り組みが足りなかった。「オンライン発表会を無事開催する」ために、必要最低限の活動に絞った結果が、アンケート結果に反映されている。交流促進のための最低限の活動として「交流に必要な個人情報」を提供したが、知らない人同士をオンラインでつなぐのは、ハードルが高かった。

例年は、参加者プロフィールを作成して「ニーズとスキルを見える化」することで、参加者が自発的に両者を事前にマッチングさせ、休憩時間などを利用して参加者同士が情報交換できるようにしてきた。

今回オンライン開催することにより、「参加者同士の情報交換」というニーズを満たすのが、本研究会の良さの１つであると、再認識できた。
セールスポイントでもあることが判明したと思います。

ですので、対面での交流が可能な形で研究会が開催できるように、コロナ禍が来年には沈静化することを願う。

⑤　最後に（まとめの挨拶）

過去 5 年間、いろんな方々のサポートのおかげで、「新たなコンセプトの研究会」を開催・発展させてくることができた。今年は、「オンライン研究会」という想定外の開催形式となったが、結果として「対面」「オンライン」それぞれの良さを知ることができた。

両者の良さを生かしたハイブリッド方式の研究会開催という新たな挑戦を通して、研究領域の発展に貢献できればと幸甚です。

引き続き、ご支援とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

代表提案者　佐々木　努（京都大学 大学院農学研究科・教授）